

東西文明の比較(26)

▼来日した人々▲

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

遣唐使は、日本からの渡航ばかりでなく、外国人の来日を迎える通路でもありました。来日外国人には、一時的な滞在者から、日本に骨を埋めた人まで様々でした。唐についてみれば、外交使節はほとんど居ません。遣隋使時代を入れても、中央から皇帝の使いは608年の裴世清はいせいせいの一行、632年の高表仁の一行、778年の孫興進の一行の3回だけです。

その理由は、「日本の天皇が、中国皇帝から冊封されなかった」ことでしょう。

時代は下って明との国交があった室町時代、15世紀初めの約10年間に、9回の明使が来日、そのほとんどが明の官人

でした(足利氏は冊封された唯一の統領)。

東端に位置する小国のニッポンに、さほどの注意を払わなくても態勢に影響がないと皇帝は考えたのでしょう。日本はそれをいいことに、唐に対して外交上の名文を争うことを避け、国内では天皇を皇帝と位置づけたのです。従って唐の外交使節が来日すれば、抜き差しならない摩擦が生じます。特に律令制の完成後初めて、遣唐使を送って来日した孫興進一行の場合は、日唐の外交的対面が衝突しかねない状況でした。幸いなことに唐側の大使が乗った船が遭難して、行方不明になったため、決定的な対立にはならなかったそうです。

🏯 鑑真の来日

外国人、主に中国からの来日は、圧倒的に僧侶が多く、なかでも鑑真かんじんとその一行の来日は、質・量共に際立っています。

鑑真は、688年揚州で生まれ、708年、21歳で長安に赴き、具足戒を受けて正式な僧になりました。その後、揚州に帰り天台宗の学僧として、また戒律の実践者、研究者として、高い評価を受けました。40代半ばには、華中・華南で戒律にかけては並ぶものがないという名声を得ていました。

日本からの留学僧、栄叟ようえいと普照ふしょうが、揚州の大明寺で鑑真に会い、来日を要請しました。そのとき鑑真は、かつて天台の高僧慧思えしが、没後、当方の国で生まれ変わり、仏教を広めたとする伝承を心に留めていました。日本こそその国であり、戒律の栄えるべきところと判断した鑑真は、行く意志のない弟子たちを置き去りにして渡日を決断しました。

それから10年後、船の難破や妨害を5度も体験しても決意は固く、753年(天平勝宝五年)、遂に日本の土を踏みました。前年の遣唐使の帰国船に便乗しての来日でした。

当初、玄宗皇帝は、鑑真を招請した遣唐使(藤原清河)に対して、「日本は仏教ばかりに熱心で、道教を崇めていない」と不満を述べ、道士になる留学者を残すよう命じました。道教の受容を拒みたい日本側は、留学者を残すことは認めましたが、鑑真の招請は取り下げませんでした。鑑真の来日意欲に揺るぎがないことを知った遣唐副使の同伴古麻呂は、機を見て独断で自船に乗せてしまいます。

平城京に入った鑑真は、早速日本での受戒を一任され、東大寺に作られた戒壇院を拠点に、仏教界の頂点に立ちました。日本では仏教公伝以来、既に200余年を経ながら、受戒の作法が実施できなかったのです。受戒の作法とは「10人の正式な資格ある僧(三師七証)が立ち会って行う儀式です。大陸で受戒した僧や渡来僧はいても、ふさわしい僧を一挙に10名揃えることは無理だったのです。

鑑真来日には、14名の僧と3名の尼僧が同行していました。そこで一挙に受戒が可能になりました。東大寺に落ち着いたばかりの鑑真のもとへ、天皇は良弁を遣わし、「何人の律師がいるか」とたずねさせました。当時の朝廷が受戒作法の確立を大切にしていたかの証明です。

🏯 朝廷と鑑真

朝廷が鑑真に期待したのは、僧尼の身分を限定し、仏教を統制する手段として、受戒を利用することで。ところが、唐にいた頃の鑑真は、それと真逆で臨機応変に戒壇をつくり、盛んに受戒をしていました。鑑真から受戒した人は、僧俗あわせて4万人以上いたと言われています。

鑑真は、官僧になる人への受戒以外に、幅広く受戒

活動を行い、仏教を根付かせたいと望んでいたはず
です。その証拠が「3千粒もの舍利」です。彼は日本で
の仏教普及のために、膨大な舍利を携えてきたので
す。鑑真としてはこの仏舍利を多くの戒壇に祀り、受
戒の機会を広げてゆこうと考えていたのです。

しかし、朝廷としては、出家予備軍を増大させるよう
な、鑑真の意欲を好ましいとは考えません。さらに、
当時の官僧たちもその特権を失わないためには、僧
侶への門は狭い方が都合がいいのです。こうして自
由な受戒活動を許されないまま、鑑真は公職を免除
され、大和上という名誉称号を与えられて、唐招提寺
へ移ることになりました。

唐招提寺は、当初「戒院」「宿院」などと呼ばれ、具
足戒を受けた僧が、律の実践を学ぶ場でした。「律」
は僧侶の共同生活を維持する規則でしたから、その
精神は共同生活をしていく中で、初めて体得されま
す。その共同生活を支える費用は、東大寺時代から引
き継がれた水田の収入でまかなわれました。ここで
研修を受けた僧侶は、やがて地方へ赴任します。そこ
で彼らは鑑真の「教え」を広めることになります。こ
れが鑑真の最晩年の生き甲斐でした。

鑑真は何をもたらしたのか

戒律の受容では確かに限界がありました。しかし、
鑑真が多くの弟子僧や多くの職人などを伴って来日
し、唐全盛時代の文化を切り取る形で日本に紹介した
ことによって、大きな刺激を与えることになりました。

一例として、木彫仏の定着が挙げられます。鑑真ら
が新しい仏像を紹介したことが、奈良後期・平安時代
にかけて、木彫の仏像が盛んに作られるきっかけと
なりました。

もう一例。鑑真が天台宗の仏典を、まとめて請来し
たことです。中国では長い歴史を持ち、唐代に流行し
ていた天台宗が、その研究者によって移植されたと
ころに大きな意味があります。のちに日本の天台宗
を開くことになる最澄が、奈良で鑑真請来の典籍を
学んだことは、決して偶然ではないでしょう。

鑑真の弟子たち

鑑真と共に来日した高弟ほっしんに法進したくと思託しやくがいます。
また日本人僧えんけいの延慶えんけいについてだけ、記してみます。

法進は、鑑真の後を受けて、東大寺戒壇院の最高
責任者になりました。鑑真は、自身の著作を残してい

ませんが、法進は日本の弟子に対して2冊の經典の
注釈書を書いています。同じ律を学ぶといっても、唐
と日本では社会環境が違います。そこで法進は経文
の言葉を唐の風俗に照らして詳細に説明しています。
歌舞・音楽、祭りの様子、賭け事、船舶などに関する
解説は、戒律の書とは思えないほどのできばえで、唐
代の史料としても一級品といえるでしょう。

思託は、師の伝記や古代の僧伝「延暦僧録」を記し
ました。また後には大安寺で講義をしたり西大寺の
造宮に参画しました。著しく唐風の強い西大寺伽藍
は、彼の助言の影響でしょう。

延慶は、藤原仲麻呂ふじわらのなかまろの第6子よしお(刷雄)です。第12回
遣唐使(752年)で留学するとき、一躍従五位下の位
を与えられました。唐で鑑真に接するうちに、その人
柄に傾倒したのでしょうか。出家して延慶と名乗り、鑑
真に付き従って帰国、その通訳を務めていました。藤
原仲麻呂が、天平宝字八年(764)に反乱(注)を起こし
て敗れると、仲麻呂の息子たちはみな殺害されまし
たが、延慶だけは死を免れ、還俗して壱岐に流刑にな
りましたが、やがてそれも許されて図書頭、大学頭な
どを歴任しました。

儒教・道教と仏教——私観ですが

ここに挙げました鑑真、そして中国密教の恵果。
いずれもその時代の中国仏教界の超大物が、鑑真は
直接日本へ、恵果は弟子1000人の中から、日本人
の空海だけを選び、密教の全てを伝授しました。な
ぜか？

儒教も道教も、生まれは中国です。それに対して仏
教はインドの生まれです。この違いを両名は感じて
いたのではないのでしょうか。仏教界の超大物の両名
は、このまま布教活動を進めても「限界がある」「やが
て消滅する」と。それならば、熱心な日本へ伝えよう
との思いが、彼らの行動の原点だったような気がし
ますが、いかがでしょうか？

■注

藤原仲麻呂の乱:「孝謙上皇・道鏡」と「淳仁天皇・仲麻呂」
との対立は深まり危機感を抱いた仲麻呂は、天平宝字八
年自らを都督に任じ、さらなる軍事力の掌握を企てる。し
かし謀反の密告があり、上皇方に先手を打たれて天皇の
もとにあるべき御璽や駅鈴を奪われると、仲麻呂は平城
京を脱出する。(Wikipediaより)